

水戸を去らねばならなかった大観の一家

「日本画の巨匠」という言葉を冠しても今日、異論はまったくなくであろう横山大観。彼は慶応四年（一八六八）八月十八日、水戸藩士の長男として水戸城下に生まれた。これより二十日ほど後の九月八日、年号が明治と改まる。大観の父、酒井捨彦は諸生派にくみしており、この事実がたたって、一家のその後、居住地を転々とかえることになる。

大観の誕生ほどない明治元年十月一日と二日には弘道館の戦いがあった。この戦いに捨彦は参加しなかったとみられるが、諸生派ゆえに家族まで白眼視される状況、迫害さえ受けそうな状況が依然つづいた。

いわゆる「天狗・諸生の戦い」の実戦が最終段階に入った年だった。それゆえか、大観のどの巨匠でも、生誕地がまだ確定されていない。異説もあるが水戸であることは確かだ、酒井家があった現在の水戸市城東二丁目には誕生地碑も建つ。

天狗・諸生の戦いがまさに進行中、産気づいた母親が自宅近くの竹林に逃れ、そこで大観を産み落とした、という伝説まであり、大観自身も同様のことを語ったりした。だがその日、水戸で実際の戦闘があった歴史的事実はない。

水戸市立博物館副館長の寺門寿明さんによると、大観については、彼の誕生から乳幼児期の一家の苦難、とりわけ母親の苦労の話が増幅されて、いくつもの伝説が生まれており、それが本人の口からも語られている。

寺門さんの調べでは、世の中が落ち着いた明治五年（一八七二）、父親の酒井捨彦は茨城県職員となるが、それまでの間、大観の一家は水戸から磯浜（大洗町のうち）と大子（大子町のうち）と下河合（常陸太田市下河合町）と、転居を繰り返した。確かな理由はわかっていないが、「一家が諸生派とみられることによる受難を避けたと考えられる」という。

捨彦の父（大観の祖父）善熙は、九代藩主・斉昭に仕えた地理学者であり、捨彦も地図作成の技術を身に付けていた。天狗側の世になったとされる明治の新時代の水戸で、諸生派だった者が県の職員になるというのは、異例中の異例といえる。捨彦が採用されたのは、地図作成の技術が新時代に行政に必要とされたること、とみられる。

その後、明治六年（一八七三）に捨彦は当時の新治県の職員に転じ、一家は同県の県庁所在地である土浦に移る。しかし、明治八年には新治県が廃されたため、捨彦は再び茨城県職員となって水戸に戻る。

ところが、捨彦はその県職員を退職し、明治十年（一八七七）のうちに一家を挙げて上京してしまう。そして、翌年から内務省衛生局の職員として働く。こうして大観は東京で成人することになるが、寺門さんは「旧藩時代の対立が尾を引き、とくに諸生派への精神的圧迫があった水戸での生活に、一家は耐えられなかった、と思われます」と話す。

ただし大観の場合、こうした生い立ちが逆に、プラスに作用する。水戸出身であることに常に意識し、それを誇りにしている。「性格的に、自分の生い立ちや境遇を全部取り込んで栄養にしてしまう・そんなところが大観にはある。それは作品全体がポジティブであり、

かげりの情緒などというものとは無縁です」と寺門さん。その点、こちらは洋画家だが、水戸出身の五百城文哉（いおきぶんさい）とは好対照だという。

五百城文哉は江戸末期に水戸藩士の子として生まれ、明治時代の初期洋画界で活動したが、父祖の地・水戸を離れ、各地を旅して歩く生活を始める。そのあげく、三十代前半の若さで日光山中において隠棲といつてよい生活に入ってしまう。

文哉の父は、「水戸市史」中巻五によれば、地方百石馬廻組の水戸藩士だったが、慶応四年（一八六八）三月十七日、諸生派（門閥派）政権一掃後の水戸で、諸生派として惨殺された。寺門さんは、そんな目に遭った郷里水戸に文哉は「愛憎半する複雑な感動を抱いていた」とみる。

